参考資料

令和元年度エゾシカ対策有識者会議(R1.7.30)における意見

【管理目標】

松　田	● 毎年どのくらい利用することを想定して準備が進んでいるのか。その数字を見たら、持続不可能かもしれないという危惧を持っているので、数字を検討していただきたい。 ● あり方検討部会では、緊急減少措置を解除しなくてもいいくらいのレベルが最低基準として試算されているという危惧がある。本当にそれでいいのか、もう少し議論した方がいいのではないか。 ● 処理施設を造ってしまったら動かさなければいけないので、減った後に処理施設が過剰になったら困ることとなるため、その辺も考えていただきたい。
伊吾田	● 資源としての活用が、各処理場でどのくらい必要かということと、地域でエゾシカ管理計画全体での管理と推進との兼ね合いを図りながら検討していくべき。
上　野	● 数値的な詰めはできていないので、今後、その水準の考え方、水準を定量的にどのように出すのかというようなことを検討する必要がある。 ● オス、メスの獲り分けのことも含めて、最低必要資源量の逆算という水準を採用するならば、考えなければいけない。

【被害者意識】

梶	● 重要なのは、被害問題が発生しているので、その被害がどういうレベで、どの水準なら許容できるのかということが第一にならなければいけない。その中で、被害管理をどう資源管理に変えていくのかということが次の段階。 ● 今は被害問題が大きい。そういう中で、どうやって被害の問題を資源管理に変えていくのかということが重要。 ● 被害を減らすために、例えばある地域で１万頭、そのうちの５割位は資源利用に回していくということになると具体的になる。

【個体数管理システム】

梶	● 地域資源といった場合、どの程度まで資源量を推定できるか、個体数を推定できるかということがあるが、それができない場合でも、現状の管理の枠組みの問題と、これからやることの整合性の問題を考えておく必要がある。 ● 資源利用と個体数管理や被害管理をばらばらにやっているので、整合をとらなければいけない。 ● 今動いている根本的な仕組みの中で、何が問題かということを具体的にしていかなければならない。 ● 農業者は被害を受けているが、動物は資源である。生産体系の中でどうやって獣害問題を入れていくかということは、全くこれからのことである。 ● 日本ほど狩猟者の倫理観がない国はない。ハンターたちは持続的に獲物が獲れればいいだけで、獲物は減らしたくない。
近　藤	● ステークホルダーが入り交じっていて、現況の分析自体から始めていかなければいけない。 ● もう少し経済学的な観点で、現況をきちんと把握して、実際に獲る人は、本当は減らしたくないと思っているとか、その辺もきちんと考えていかないと組み立てられないのではないか。

【今後の進め方】

近　藤	● 現状をきちんと把握して考えたのかという点や頭数の問題など、もう少し検討する必要があるのではないか。 ● 管理学的課題と産業的課題のところをもう少し細かく整理した方がいいのではないか。
伊吾田	● どうやって資源管理に移行していくか、そのための課題は何かという整理を、資源管理に向けた課題の整理、被害管理と利用との課題の整理を含めて、もう少し議論を深めていきたい。